

# 黒人小説にみる孤立と連帯（I）

ロバート・ジョーンズと

ソロモン・サウンダーズ

安部大成

## 1

第二次世界大戦でアメリカ黒人は二つの前線に立ち、双方の前線で勇敢に戦った。この二つの戦い、ファシズムに対する国外での戦争と人種差別に対する国内および軍隊内での闘争は黒人全体に大きな影響を及ぼし、戦後、幅広い層にわたって、堅い決意のもとに黒人解放運動に立ち上る新しい黒人<sup>(1)</sup>を誕生させることになった。

第二次世界大戦に対するアメリカ黒人の態度は複雑なものであった。

1939年、ヨーロッパで戦争が始まった時、アメリカ黒人の多くは局外者の態度を取っていた。彼等にとっては、ヨーロッパのヒトラーよりもアメリカのヒトラー的人種差別主義者達の方が問題であり、またヨーロッパ諸国のアフリカ植民地主義に対する黒人の反感はヨーロッパ白人諸国間に生じた戦火を対岸の火と傍観する風潮をもたらした。<sup>(2)</sup>

もっとも、1936年のベルリン・オリンピック大会でヒトラーが示したアメリカ黒人選手に対する差別態度は彼等の記憶に新しく、この面での反ヒトラー感情もあった。<sup>(3)</sup>しかし、国外のファシズムと人種差別主義に対決し民主主義を守る戦争に参加しようとした黒人達の望みは合衆国陸海空軍および防衛産業界に侵透していた人種差別主義の排外をうけ、赤十字社に申し出た献血協力も黒人の血液が白人の血液に混入するのは好ましくないとする偏見によって拒絶され、これらの黒人は非常に不満と憤りを感じながらも局外者の立場に追い込

まれる傾向にあった。<sup>(4)</sup>

こうした局外者の態度は、1941年、日本が真珠湾を攻撃し、アメリカが参戦することになった時期にもみられ、この戦争をヒトラーとアメリカ白人、黄色人種日本人とアメリカ白人の戦争であるとする風潮があった。しかし、アメリカの参戦によってこの戦争が身近な問題となり、アメリカ国民として、これを受けとめねばならぬ時期が到来していた。奴隷制時代より根強く存続する人種差別をはねのけ、これを崩壊させて行くには、この戦争が持つ人種面での欺まん性に拘でいしてシニカルな傍観者の態度を取り続けているわけにはいかなかった。

この戦争の理想的側面を把握し、この戦争を契機に国外のファシズムと戦い、同時に国内の人種差別とも戦ってこそ黒人は自らの解放を押し進めることが出来る、という主張が、やがてアメリカ黒人の代表的な態度として表明されるようになった。<sup>(5)</sup>

かくて彼等は人種隔離部隊で、また防衛産業部門の人種差別工場で、民主主義を守る戦争に参加して行った。

黒人作家 Chester Himes は小説 *If He Hollers Let Him Go* (1945) で第二次世界大戦時の軍事工場での黒人、白人工員間の人種抗争と、黒人工員と白人女工の離間された人間関係を軸に、人種差別制度がもたらす人間性破壊と人間疎外を描いた。

この作品の主人公 Robert Jones は軍隊と工場での黒人差別に激怒し、戦争非協力について考えながら次のような結論に至る。

たとえ黒人が全員そろって兵役と労働提供を拒否したところで「アメリカ白人は黒人なしでも戦争を遂行することは疑いなく、さらに彼等が勝利をおさめることは疑う余地もない。そうなれば彼等は我々黒人を殺すかも知れない。」<sup>(6)</sup>

また、人種隔離部隊に配属され南太平洋の戦場で戦った黒人兵の軍隊内差別との不断の戦い、敗退した日本軍に代って上陸したアメリカ軍がフィリッピン

女性に働いた略奪行為への憤り、オーストラリア米軍基地でのアメリカ白人部隊と黒人部隊の武力衝突などを描きながら、この民主主義戦争の正体は何であったかを問いかけつつ、かつては社会と軍隊での昇進を求めていた一黒人下士官 Solomon Saunders が黒人下級兵や黒人女性の勇気と苦悩と情愛に触発され、自己変革をとげていく姿をとらえた、黒人作家 John Oliver Killens の小説 *And Then We Heard the Thunder* (1962) の主人公はいう。

「もしヒットラーがアメリカを征服したら、黒人は今より百倍も悪い状態に置かれるだろう。<sup>(7)</sup> それ以上に考えねばならないのは、もし黒人がこの戦争に協力しなかったら、黒人はアメリカ社会で自由や権利を獲得することは出来ぬだろう。<sup>(8)</sup> 「アメリカという国はそんなに馬鹿げたほど寛大な国だと思ふかね？」

これらの作中人物の考えは第二次世界大戦を国外のファシズムと戦い、同時に国内の人種差別と闘う戦争と規定して、生命を投げ捨て闘う決意をしたアメリカ黒人、故郷を人種差別の国に持った黒人のやむにやまれぬ気持を表明したものと見えよう。

人種、民族の差異に関係なく人間は平等であるという明解な原理を社会的真実として具現するために、苦難の道を歩いて来たアメリカ黒人の喜びと悲しみ、愛と憎しみ、希望と絶望、安堵と恐怖、やさしさと怒りを描いたこの二つの小説の主人公、Robert Jones と Solomon Saunders に注目し、その社会的行動形態にみられる、黒人解放運動からの孤立とこれとの連帯について考えてみたい。

注(1) Stephen Wright, *The New Negro in the South* in *The New Negro* edited by Mathew H. Ahmann (Biblo and Tannen Publishers, Inc., 1961), pp. 7-9.

S.ライトは、1950年代後半から1960年代前半にかけて南部を中心に展開された、非暴力直接行動にもとづく差別廃止闘争を指導し、またこれに参加し、或は支援した黒人を新しい黒人と規定し、差別制度に対して妥協的であったり、消極的な態度を取っていた従来の黒人と区別している。そして、この黒人の誕生した時期を戦後の1945

年から1950年の間に求めている。

- (2) Richard M. Dalfiume, *The 'Forgotten Years' of the Negro Revolution*, in *The Segregation Era 1863—1954* edited by Allen Weinstein and Frank 'Otto Gatell (Oxford University Press, 1970), pp.238-239.
- (3) Benjamin Quarles, *The Negro in the Making of America* (Collier Books, 1964), p.215.
- (4) Richard M. Dalfiume, *op. cit.*, p.237.
- (5) Richard M. Dalfiume, *op. cit.*, p.240.
- (6) Chester Himes, *If He Hollers Let Him Go* (A Signet Book), p.108.
- (7) John Oliver Killens, *And Then We Heard the Thunder* (Alfred. A. Knopf, 1970), p.17.
- (8) *Ibid.*, p.17.

## 2

ロバート・ジョーンズが新たに、黒人差別と排外に直接することになったのはアトラス造船所の海軍船舶修理場の主任になったときであった。

アトラス造船所の労働者管理と人種管理政策は船舶修理場の作業班編成と作業過程にはっきりと現われていた。ここで共同作業に従事する作業員は黒人作業班と白人作業班に人種隔離され、黒人は白人よりも不利な労働条件のもとで働いていた。造船所の人種差別政策と、また人種偏見と差別に汚染された白人労働者達の排外行為とに直面した黒人労働者達の憤まんは社会での差別と排外に加えて、戦争状態にある母国の防衛産業部門で行なわれる差別と排外に対する怒りを伴い、非常に激しいものであった。

黒人作業班と白人作業班との対立抗争の中で、ボブ(ロバートの略称)は一般に白人で占められている作業班主任の地位についた。もちろん黒人作業班の主任である。彼が労務関係者によって特に果たすことを期待されていたのは、黒人作業班の白人作業班に対する、いわゆる緩衝地帯の役割であった。

人種別に分けられた作業班はさらに溶接, びょう打ち, 切断といった作業種目

に分けられていたが、各作業班は互いに作業過程で要員を貸し合う仕組みになっていた。作業中、兩人種間に生じる争いの主たる原因は白人作業班が黒人作業班に要員を貸さず、黒人作業班の仕事は支障をきたし、これが結局は黒人の怠慢と無能力によるものとされることにあった。白人作業員達は差別感情から黒人作業員との共同作業を拒否するのだが、黒人作業班の主任が白人である場合は何とか要員の都合がついた。ところがボブが主任になって白人監督や主任達の反感が強まり白人作業班から要員を借りるのが非常に困難になって彼は窮地に立たされることになった。

ボブはオハイオ州クリーヴランド市出身のいわゆる北部黒人で、差別行為に出る白人に対してはためらわず立ち向う闘争性のある黒人であり、修理場には戦争ブームでカルフォルニア州に出かせぎに来た、偏見と差別感を強く残存させている南部白人が多く、対立関係は一層高まった。

こうした状況は現場を白人支配の場にしようとして望んで来た者達にとっては絶好の機会であった。

ボブは仕事を遂行する義務があり、黒人作業班は要員の確保を彼に求めてもいた。彼が要員を借りるために白人主任や作業員と争えばこれを理由に、争わねば要員は借りられず、作業は支障をきたすのでこれをもとに、彼を主任の地位から落すことが出来るのであった。

修理場での人種間の対立感情を一層緊張させていた要因はほかにもあった。各作業班には数名の女子作業員が働いていて、白人作業員は白人女性と黒人男性との接近を極度に嫌って警戒心を高めていた。また黒人男性に対して異常な感情をいだいている白人女性もいた。

ボブはこの対立抗争に巻き込まれて主任の地位を奪われることになるが、それはこの異性を含めた最も激しい対立関係にはまり込んだためである。

C. ハイムズの『叫んだら、放してやれ』は人種抗争の中でのボブと白人女性マッジ・パーキンスとの、偏見によって歪曲された人間関係と、この関係か

ら、またこの関係を規定する差別社会から、如何にしてボブが自らを解き放とうとしたか、を主たるテーマにしている。

びょう打ち工を必要とするボブは白人主任達に適当な理由で一蹴されていたが、日頃、彼に好意的であった白人主任ドナルドが手のあいていたマッジを世話してくれる。ところがマッジは南部出身の女性で黒人と共同作業することを拒否し、ボブを侮辱する。白人女性に *nigger* と罵倒されて激高した彼は女性に手をかけることが出来ぬので暴言を吐いてしまう。

白人女性に対して失礼であったとの理由で彼は労務課へ呼び出され、主任の地位からはずされてしまう。彼は黒人を差別し、さらに侮辱する言葉を吐いた白人作業員に対しても適切な処置を取るよう要求するが聞き入れられず、逆に彼が解雇の対象ともなること、さらに防衛産業部門での失職は徴兵対象ともなるとおどされる。労務課長マックドガルは彼を主任に任命した男であったがひとたび黒人のボブが従順でないと判断すると地位を剝奪するばかりか職をも奪い、さらに徴兵させる力まで持っている男なのであった。彼はそれに気づいて、その頃、時々襲われていた底知れぬ恐怖感にとらわれ、立ちすくむ。

ボブはロサンゼルスに来てしばらくするまで、白人社会を恐れたことはなかった。彼が白人社会に恐怖を感じたのは1941年の暮れ、日本が真珠湾を攻撃し、アメリカが参戦した時であった。その時、アメリカ市民である日系米人が何一つ罪を犯していないにもかかわらず、裁判もなく、何一つ機会も与えられず、次から次へ、強制収容所へと送られていくのを目撃した。彼はアメリカ白人社会が有色人種に対して見せる生殺与奪の力を目撃したのであった。その日以来、彼は時々、心底をゆさぶるような恐怖感に襲われ、心身共に困ばいするようになった。この恐怖感はその持つ闘争意欲を崩壊させるほど彼をおびやかした。

差別と排外の中でぼう然自失した彼を奮い立たせたのは彼がこの恐怖感をふるい落とす手がかりを得たときである。それは娯楽室の賭博場で白人作業員達と

乱闘した時の相手の一人、ジョニー・ストッダードをナイフで脅迫した時のことであった。

仕事中、不意にナイフを持って迫って来たボブの前に、この筋骨たくましい白人の男は恐怖におののいて立ちすくみ、その血の気のない表情は見るもあわれなものであった。この時、ボブをとらえてはなさなかった、あの白人社会に感じた底知れぬ恐怖感が一挙に解消して行くのが感じられた。そして安堵感と自信が湧き上って来るのを感じた。彼は生殺与奪の立場に立つことによって、常に黒人をおびやかして来た白人と、全く対等の、共通の場に身を置いていることに気づいた。

かくして、彼が従来持っていた闘争意欲は新たによみがえり、彼は身にふりかかった差別に戦いを挑むことになる。

労務担当者に彼ばかりでなくマジの処置をも要求して拒否された彼は、アトラス造船所の労働組合に公平を期するため、マジの差別行為も含めてこの問題の処置を求めに行くが、人種対立の緩和と生産向上を第一とする白人中心の組合は彼の要求を聞き入れようとしない。

労務担当者と労働組合から差別問題の処置を拒否されたボブはマジ・パーキンスと直接対決することになった。

このマジとの対決の仕方と内容は注目に値する。

彼はマジの差別性を糾弾し、その誤りを正そうとするに際して、まず人種差別によって遮断されている人間関係をたて直そうとする。そのためにはマジと親しい関係を成立させ、意思の疎通を図らねばならない。ところが、彼がマジに近付こうとすると強い疑念と危険感が生じて行動出来なくなる。ボブはマジという白人女性に、彼が接した他の北部白人女性とは異なる、異常な反応が暗示されるのを直感したからである。

彼女は黒人男性に対して、偏見と差別感にもとづく異常な性衝動を感じているに違いなかった。黒人の男を誘惑し、肉体関係を持ち、露見したり、意のままに事が進まぬ場合には、暴行された、と悲鳴を上げて白人の男達を呼び集

め、黒人がリンチされ、逮捕される興奮した状況に性的満足を得る女に違いなかった。

「私は初めて彼女に出会った時からそれに気づいていた。彼女はそれを心待ちにしていたし、それを当然の権利として望んでいたのだ。私は、彼女があらわな胸と太ももをさらけ出し、身体で黒人の男達を誘い込み、彼等をリンチにかけさせるのを想像することが出来た。<sup>(1)</sup>」

黒人の男が一度このワナに落ちると白人社会の恐ろしい制裁からのがれることは殆んど不可能であった。彼は白人社会の人種差別のワナそのものが、それは日系米人をねこそぎ強制収容所へ送り込んだ恐るべき力を秘めているワナなのであるが、このマッジという女性に仕掛けられているのを感じて戦りつする。

彼はこの恐怖を、ジョニイの生命をおびやかすことによって払い落とし、マッジに近付いて行くことになる。

彼がマッジに近付いたのは彼女のボブに対する行為の差別性を指摘し、この誤りを自覚させるのが目的である筈であった。そのために、人種差別によって遮断されている二人の間の人間関係を回復する必要があったのだ。ところがボブがとった行動は、人種差別関係の壁の一角を崩して、そこに意思の疎通する人間関係を生み出す上で、自ら人種偏見と差別の一形態に身をゆだねてしまう大きな誤りを犯すことになった。

彼は深夜、マッジの部屋にしのび込むことになるが、彼に彼女の住所を教えたのは白人の主任ドナルドである。この男は彼女の言動に立腹して、ボブに直接マッジと対決せよと勧めるが、実は白人女性と黒人男性の关系到特異な興味を<sup>(2)</sup>いだいている男であった。

ボブはドナルドの勧めに狼狽する。ボブはマッジを肉体関係で屈服させ、彼女を性的に支配し、そうすることによって彼女の鼻もちならぬ白人至上主義意識を損傷させ、職場で行なった彼女の差別行為を無意味なものにしようと考えていたのだ。

これは彼女の言動に現われた差別性に対する解決をもたらすどころか、逆に彼は自ら、黒人の男は生ける黒い性具だという差別社会の性的偏執を補強させる役割を果すことになるにすぎない。

この誤った問題解決の意図を持ってマッジの部屋に入り込んだボブは彼女を屈服させるどころか、自ら彼女のワナに落ちかかった自分を発見して恐怖する。

彼女は部屋に入り込んだ彼に白い肉体を誇示し、挑発する。そして、わざわざ抵抗までして彼に組み伏せられる。彼がそこで耳にしたのは、暴行してくれというマッジの叫びであった。彼女はまさに彼が直感した通りの異常な、黒人にとっては危険きわまりない女性だったのである。彼はこの言葉を耳にするや彼女の部屋から逃げ出す。彼は危うく婦女暴行犯に仕立てられるところであった。

彼はこの時以来、マッジという女性が恐しくなる。彼には、彼女は黒人を抑圧し、支配し、反逆する者を抹殺しようとする差別社会の権力、謀略、不正、暴力、偽善、誘惑といった黒人を破滅に導くあらゆるものの権化に見えた。

彼はマッジを思い出しては襲われる恐怖感をジョニーに対する殺意によって払い落すようになる。

だがジョニー・ストッダードを殺害する決意も考えてみれば迫力の乏しい、心の支えにならぬものであることに彼も気づいていた。

「私はこの男を殺すことを考えたが、今では何の役にも立たなかった。それは子供っぽく、ばかげたことであり、全く無駄なことに思えた。私は白人全部を殺すことが出来ないのだ。これは分り切ったことなのだ。」<sup>(3)</sup>

彼はアトラス造船所の海軍船舶修理場に根を広げた人種差別との戦いに不幸にも失敗したのであった。それは彼がアトラス造船所の人種差別政策と、また社会の偏見と差別に汚染された白人作業員達の排外行為に、唯一人で立ち向かったこと、そして差別と戦う上で彼が誤った考えを持っていたことによる。要するに彼は差別と戦う上で、彼の側にある者達から全く孤立していたのであ

た。

ボブはマジジの件で労務担当者マックドガルと激論したとき、言葉巧みに人種差別政策を貫徹する彼に立腹して、この男を殴り倒そうとして思いとどまったことがある。それは白人社会の報復を恐れたためではなく、彼が所有する1942年型の新車、ビュイック・ロードマスターを失いたくなかったためである。

「私の車は自分には何かの証明であった。一種のシンボルなのであった。この気持を分析しはしなかったが、たとえ職を失ってもこの車だけは失うことが出来なかった。<sup>(4)</sup>」

彼にとって42年型ビュイックが何のシンボルであるかは彼が心から愛している女性、アリス・ハリソンが誰であるかによって判明する。アリスは黒人中間階級上層部に属する家庭の娘で、容貌も肌色も白人と殆んど変らぬ混血の美女であった。彼は彼女の両親が黒人下層階級を彼等の階級の手足まといとして軽蔑し、嫌悪するのに強く反発しながらも、この階級の豊かな生活様式を身につけた、優雅で知性のあるアリスに心の底から傾倒していた。42年型ビュイックは彼をアリスの世界に結びつけていたのである。彼はこの車にアリスを乗せてドライブをしたり、高級レストランで食事をするのが楽しみであった。ところが彼は恋人アリスと近く結婚するつもりでいながら、彼の借家の隣室に住む労働者の妻である黒人女性とも関係していた。また、アリスを乗せる車でアトラス造船所に勤める仲間の作業員を毎朝職場へ運んでいた。こうした行動で目目に価するのは彼の黒人中間階級上層部と黒人労働者階級間の往復行為である。彼はいずれの世界にも定着出来ず、双方の間をビュイックに乗って行ったり来たりする、階級的根なし草なのである。この階級間往復行動は彼の社会意識から生ずるものであった。

彼が主任の地位を奪われたとき、彼の班に属する15名の作業員達は彼を支援し、結束していた。ボブが先導さえすれば、彼等は団結して強固な抵抗を試み

たであろうし、緊迫した人種抗争状況は、この黒人作業班の戦いに他の黒人作業班をも加えて、アトラス造船所の生産を混乱状態に追い込み、差別政策をとる経営者側に打撃を与えたことであろう。

しかし、彼はこの黒人仲間を騒々しい日和見主義者の集まりと決めてかかり、全く相手にしていなかった。

また、アリスの所属する階級の人種差別に対する、この階級特有の闘争を評価し、アリスに協力を求めたか、といえばそうでもなかった。彼はこの階級の差別に対する妥協的態度に反感を持っていたのである。

アトラス造船所をやめて、もう一度大学にもどり、法律を学んで、有力な社会的地位につくようにとアリスは彼に求めている。

「私は世間で重要な人になりたいのです。私は、自分の力ではどうすることも出来ぬ人種差別の大半からまぬがれたいので、重要な、人に尊敬される、財産のある人を夫にしたいのです。<sup>(5)</sup>」

しかし、そうはいうものの、彼女はこの逃避的態度を保持することが不可能な事態に直面すると、やむにやまれず反撃に転ずるというこの階級特有の闘争性も、同時に保持していた。これは、彼女を coon（アライグマ、黒人の蔑称）と呼んだ二人の白人警官に身分証明書の提示を求め、ロサンゼルス市長と直接接触出来る立場から、この警官の態度を改めさせたり、ボブが無実の罪で手配されたとき、知人の弁護士と共に法廷闘争を行なおうとするところに表明される。

だが、彼はこの階級の闘争力に依頼を置かなかった。白人権力社会は強固であり、法廷闘争には多大の費用と時間を必要とし、彼には無駄であった。NAACP のウォルター・ホワイトは無意味な存在であり、ボブは彼一人の身にふりかかった差別を彼一人で戦い抜くつもりでいた。また奴隷反乱で有名な T. ローヴァチャーも彼には意味がなかった。解放の歴史も運動も自分にはかわりがないと考えた彼が白人女性マッジ・パーキンス唯一人を差別の根元と妄想したのはその社会意識からして当然の結論であり、戦いの失敗は目に見え

ていた。彼は激怒と恐怖と絶望の中に茫然自失する。彼はアリスと結婚し、安堵の世界に到達しようと思うに至った。

アリスと平安な家庭を持ち、父親となり、弁護士となって活動する将来を思うと、急に職を失って徴兵されて行くのが心配の種になって来る。不承不承、彼は労務担当者のところへ詫びを入れに行き、一作業員として仕事を続けることにした。

修理の完了した船内を見回っていた時のことである。小さな船室のドアを開けて中をのぞき込んでみると誰かがいる気配がする。そこで中に入って眼をこらしているうちに、それがマッジであることを知って彼は驚く。彼女は仕事中に怠けて仮眠していたのである。あわてて外に出ようとするすると人の足音が近づいて来る。マッジはとっさにドアを閉めて仮眠の現場を押えられまいとした。ポブは彼女と密室にいるところを人に見られたくないので外に出ようとするがマッジは彼に抱き着いて離さず、口唇を寄せて来る。これを押しのけようとしているところへ海軍の調査官が来てドアを開けようとするが開かないのでバーナーでドアを切り開けと他の者に命ずる。ポブは内側のロックをはずして出て行くと叫ぶと彼女は突然大声で悲鳴を上げる。

「助けてっ！ 助けてっ！ あっ、助けてっ！ 誰か白人の男の人、助けてちょうだい！ 私、強姦されてるのよ！<sup>(6)</sup>」

彼は白人作業員達の集団暴行をうけ、病院に収容され、婦女暴行の現行犯として警察に突き出されることになった。

彼は差別との戦いを放棄した日に差別と排外の恐るべきワナに落ち込んだのであった。造船所の守衛の手から逃れた彼は電話でアリスに逃亡の手助けを頼むが彼女は逃亡に反対し、知人の弁護士を呼んで法廷で戦おうと主張する。

白人が支配する司法機関を全面的に信用しない彼は彼の逃亡を助けようとしていないアリスとも決別してしまう。逮捕は時間の問題であり、有罪判決は明白であり、長期の刑が予想される彼にとっては、むしろ極刑に処されてこの世を去

る方がよさそうであった。そう考えた彼は白人社会への報復にジョーニ・ストッダードを道づれにしようと決める。白人街へ向った彼は途中で逮捕され、留置所に身を置くことになった。あれだけ殺意を持っていたジョーニをすら殺せなかったのだ。

留置所にいる彼のところへ二人の訪問者があった。アトラス造船所の社長ノートンとロサンゼルス地区の判事モーガンである。

ノートンの話によれば、寛大な心の持主マッジ・パーキンスは海軍船舶修理場の人種関係が悪化して、防衛産業の生産に支障をきたしてはいけなからと、ボブに対する告訴を取り下げたいと申し出ておられるのであった。

しかし、事實はそうではなく、この悪質な黒人排外事件に激怒した黒人労働者達の人種暴動を、アトラス造船所の社長は恐れているのであり、ボブがぬれぎぬを着せられているのを判事は知っているのであった。問題は如何にスムーズにロバート・ジョーンズという黒人を社会的に葬るかであった。

ボブは二人に説諭され、不起訴の条件として、二度と白人女性に近づかぬことを約束させられた上で、合衆国陸軍に入隊させられることになる。人種隔離部隊へ、民主主義を守る戦争のために、

C. ハイムズはロバート・ジョーンズが白人社会およびアトラス造船所内での人種差別と戦う上で、黒人中間階級と黒人労働者階級から孤立して戦ったために、また誤った考えのもとに戦ったために、彼と身近かなところで抗争関係にあった二人の白人労働者、マッジ・パーキンスとジョーニ・ストッダードを敵としたが、実際の敵は自らの階級にとって都合のいい社会体制を保全するために、人種差別を温存させ、これを巧みに操作して黒人労働者と白人労働者を抗争させている資本家階級であることを、この階級の代表的人物とその御用聞き、アトラス造船所社長ノートンとロサンゼルス地区判事モーガンを小説の最後に登場させて劇的に描いてはいるが、同時にC. ハイムズはこうした支配階級の人種差別政策にやすやすと身をゆだね、黒人差別の先兵をつとめている多

くの白人労働者達に対する激しい批判を、アトラス造船所での白人労働者達の許し難い差別行為を克明に描くことによって行なっているといえよう。この小説でロバート・ジョーンズがあからさまに投げつける白人支配下の労働組合や家父長的態度の強い白人リベラル、トーマス・レイトンへの非難にもC. ハイムズの白人中間階級および白人労働者階級に対する批判が表明されているといってよからう。

注(1) Chester Himes, *If He Hollers Let Him Go* (A Signet Book, 1971), p. 118.

(2) *Ibid.*, p. 111.

「あの女は誰かにうんとやってもらったらいいいんだ。」彼は誰か黒人の男に、といたかったようだが、そこまではいえず、顔を紅潮させて、『そうしたら、あの女の鼻もちならん偏見も少しはなくなるぜ』といった。……『おい、俺に女の住所を教えてくださいろというんだ』というとな彼はまた顔を赤らめたが、私にちらっと好奇の眼を向けていった。『彼女の病気をなおしてやれるぞ。』

(3) *Ibid.*, p. 73.

(4) *Ibid.*, p. 32.

(5) *Ibid.*, p. 92.

(6) *Ibid.*, p. 168

### 3

「近年の黒人の歴史の流れに、その『分水界』を求めれば、それは1939年から1945年に至る時期に求められる<sup>(1)</sup>」と述べたR. M. ダルヒュームは、50年代後半から60年代の初めにかけて高揚した黒人解放運動に見られる闘争精神の根を、この第二次世界大戦期の国外のファシズムと国内および軍隊内での差別に対する戦いに求めるべきであるとし、第二次世界大戦が黒人に及ぼした影響に注目している James Baldwin, Gunnar Myrdal, E. Franklin Frazier および Charles E. Silberman の見解を紹介しながら、50年代後半から60年代の初めにかけて、多数の黒人を動員して展開された公共機関の差別廃止闘争の

精神的基盤を、1954年の法廷闘争の勝利、或はアラバマ州、モントゴメリイ市のバス・ボイコット事件に求めるのは不適切である、と指摘している。

S.ライトは R. M. ダルヒュームよりも時期を少し遅らせて、解放運動に立ち上った黒人の誕生した時期を戦後の1945年から1950年に求めているが、1939年から1945年にまかれた種子が、この時期に芽を吹き、50年代後半から育って行ったと見れば両者の見解にあまり違いはない。

小説を例にとれば、黒人作家 Frank Yerby の短篇、*Home Coming* (1946) はまさに、戦争体験を経て意識を変革した、南部小作農民の、南部の田舎町での差別との対決を描き、戦後に姿を見せる黒人の解放精神をとらえたものであり、Ernest J. Gaines の短篇、*The Sky was Gray* (1964) にもこの戦争中に、南部の田舎町に誕生しつつあった新しい黒人の姿が見える。

C. ハイムズの『叫んだら、放してやれ』に登場するアリスおよびその両親に代表される黒人中間階級は、著名な黒人社会学者、E. Franklin Frazier が *Black Bourgeoisie* (1957) でとらえた階級であるが、この階級の価値観と行動形態にそぐわない、新しい黒人中間階級もまた、第二次世界大戦期に誕生していた。この新しい中間階級に属する黒人が、実は50年代後半から60年代の初めにかけて展開された、非暴力抵抗運動の主流を占めることになるが、この新しい階級が誕生していたことを、E. F. フレイジャー自身、1962年の Collier 版に寄せた序文で認めている<sup>(2)</sup>。

J. O. キレンズの『そして、私達は雷鳴を聞いた』はこの新しい黒人中間階級が、戦争体験を通じて誕生する過程を描いたものである、ということが出来よう。

この新しい中間階級は単にファシズムと戦い、国内および軍隊内の差別との戦いによってのみ誕生したのではなく、古い黒人中間階級が嫌悪し、背を向けていた、俗にいう黒人下層階級、実は白人社会の差別と排外によって極めて貧しい状態にある労働者階級をいうのであるが、この階級の勇敢な反差別闘争に触発されて、中間階級特有の、体制内昇進行為による差別との回避を放棄し、

黒人下層階級と手を結ぶことによって新しい中間階級に誕生して行った、とするのが J. O. キレンズの小説を一貫する見方である。

若い法律家 Stanley Sanders の自伝, *I'll Never Escape the Ghetto* (1967) は高等教育をうける機会をつかんだゲトー出身の彼が, ヨーロッパ留学中に1964年のハレム暴動の報に接して, ゲトー出身者でありながらゲトーを見捨てて下層階級との接触を断ち, 何一つ疑問を感じなかった自分に気づいて驚き, 翌年, 生れ故郷であるロサンゼルスでのゲトー, ワッツの大暴動を契機に, 生命を賭して差別に立ち向う下層階級の無償の行動に触発され, ゲトーからの逃避行為を放棄し, ゲトーにもどって解放運動に参加するに至った手記である。

この S. サンダースの短い自記は, 60年代の後半, 黒人解放運動が新しい局面を迎え, 北部諸都市では黒人暴動が続発していた時期に, ゲトーに住む黒人は無知であり, 怠慢であり, 無気力である, と考える社会通念に加えて, この通念を補強する教育を受けた若い黒人知識人が, 遂に暴動によって, 差別のもたらした劣悪な生存条件を打破するために立ち上がったゲトー黒人の解放意欲に触発され, 自らの逃避行為とそれを支えていた価値観を放棄し, 下層階級に属する黒人に対していただいていたエリートの偏見から解き放たれ, 彼等と一体になって黒人解放運動を押し進めるに至った, 新しい中間階級の誕生を例証するものである。

J. O. キレンズは小説の分野で, 第二次世界大戦期に, 軍隊内人種差別と特に勇敢に戦った下層階級に属する黒人の行動に, 物質主義的打算に拘束されぬ, 生々とした人間性を見出し, 形骸化された中間階級の価値観から脱却し, 黒人解放運動における, 中間階級の新たな役割を自覚していく, こうした新しい黒人中間階級の誕生過程を描いたのである。

『そして, 私達は雷鳴を聞いた』は Part I The Planting Season, Part II Cultivation, Part III Lightning — Thunder — Rainfall, Part IV

The Crop の4部、つまり、自己変革の苗が植えつけられる季節、苗が畑で育つ時期、雷光があり、雷鳴がとどろき、雨が降って作物が成熟していく時期、そして、穀物がとれる時期の4部32章からなる。

この小説の題名は、作品の見返しに掲げられてもいるが、奴隷解放の闘士、Harriet Tubman が黒人兵と共に戦った、砲火がとどろき、血の雨が降る南北戦争の戦場を表現した有名な言葉の一部である。

この小説が、奴隷解放の母、H. タブマンの言葉を題名としている点からも窺われるが、主人公、ソロモン・サウンダーズの意識変革には下層階級に属する黒人兵達と共に、彼が接した黒人女性、さらにフィリッピン女性、オーストラリア女性達が決定的な役割を果している。

そこで、彼と部下である黒人兵達との関係、および彼とこれらの女性との関係に特に注目しながら、ソロモン・サウンダーズの軍隊内差別との動揺にみちた戦いの跡を追い、彼の自己変革の過程を、旧い黒人中間階級と新しい黒人中間階級の価値観と行動形態にも触れつつ検討してみたい。

注(1) Richard M. Dalfiume, The 'Forgotton Years' of the Negro Revolution, in *The Segregation Era, 1863-1954* edited by Allen Weinstein and Frank Otto Gatell (Oxford University Press, 1970), pp.235-236.

(2) E. Franklin Frazier, *Black Bourgeoisie* (Collier Books, 1962), pp.12-14.

(未完)